

## 「観光」よりも「生活環境」を重視したまちづくり ～富田林寺内町（大阪府富田林市）～

大阪府の中心地から東南へ約 20km、富田林市のほぼ中心部にある富田林寺内町。中世に真宗の自治都市として整備され、江戸時代以降、商業のまちとして栄えたこのまちには、今も通りには江戸時代から昭和初期に建てられた町家がずらりと軒を並べる。今回は、大阪府唯一の「伝建地区」（重要伝統的建造物群保存地区）として、大阪府の貴重な歴史文化遺産でもある富田林寺内町のまちづくりの取り組みについてレポートする。

### 宗教自治都市として興ったまち

富田林寺内町は、近鉄長野線富田林駅から約 300 m 南にある。南端は石川の河岸段丘による土塁、北端は堀割り（現在は暗渠）によって区画され、東西約 400m、南北約 350m の広がりを持つこの地区に、現在も、創建当時の六筋七町の町割りが残され、歴史的な風情が色濃く残っている。

寺内町とは、真宗の寺院を中心に、堀や土塁で防御した町をいう。富田林寺内町は、永禄年間（1558～69）の初め頃に京都興正寺門跡十六世証秀上人によって創建された興正寺別院（富田林御坊）を中心とする宗教自治都市である。

明かりとりと風通しのために設けられた虫籠窓



国土交通省「日本の道百選」に選ばれた「城之門筋」（興正寺別院前）

証秀上人が、荒芝地を銭百貫文で購入し、近隣 4 か村から 8 人の有力者を集めて寺院を建立し、八人衆の合議制のもとで、御坊を中心としたまちづくりが行われた。

江戸時代に入ってから、幕藩体制のなかで宗教色は次第に薄れ、周辺地域の農作物の集散と商業活動による在郷町として発達した。寛文 8 年

（1688 年）の記録では、樽や布など酒造や木綿に関する商いが盛んで、51 種類、149 の店舗が軒を並べていた。重要文化財旧杉山家住宅、仲村家住宅など、往時の繁栄を偲ぶ重厚な町家が現存し、歴史的な景観を形成している。

寺内町にある建物 510 戸のうち 269 戸は、江戸、明治、大正、昭和初期の時代のものである。太平洋戦争では、幸運にも空襲を受けず、焼失を免れたことから、まちには多くの歴史的文化的な建造物が残った。

### 富田林寺内町建造物の建築年代

建築時期	戸数（戸）	割合（％）
江戸～明治中期	124	24.3
明治後期～大正	41	8.1
昭和初期	104	20.4
昭和戦後～昭和40年	44	8.6
昭和40年以降	197	38.6
合計	510	100.0

（資料：富田林市文化財課）

富田林市では 1991 年に、この優れた文化遺産を後世に伝えるため、寺内町のうち、約 11ha を文化財保護法に基づく伝統的建造物群保存地区に指定。1997 年 10 月には、大阪府では初めて、国の文化遺産として重要伝統的建造物群保存地区に選定された。

### 寺内町の産業と文化

富田林は古くから交通・産業の要衝であり、東高野街道（京都と高野山を結ぶ高野山参詣道）と富田林街道（堺と富田林、さらには大和国境・水越峠を結ぶ街道）が交差する交通の結節点でもあり、商人等の往来で栄えた。また、大和川・石川





後の住民のまちなみ保存への大きな盛り上がりにつながった。そのきっかけとは、1983年に寺内町のシンボリックな存在である旧杉山家住宅が売りに出されたことであった。これに対し、市は保存の検討をするとともに、1億6千6百万円で買収。同年12月には、国の重要文化財に指定された。このことがきっかけとなり、まちなみ保存運動が再開することとなった。旧杉山家は85年から3年がかりで解体修理され、87年からは市の施設として一般公開されている。

寺内町には以前から町を通る都市計画道路の計画があり、市と地区住民との間で勉強会が持たれるようになり、94年には地元に残る優れた歴史的まちなみ・文化遺産の保存・継承を目的に地元住民が中心となって「富田林寺内町をまもり・そだてる会」が結成された。住民の意識は都市計画道路の見直しと同時に「伝建地区」の指定という作業にも向けられることとなった。

住民が望んだのは単なる観光資源としてのまちなみ保存ではなく、日常的な地域住民としての生

活を確保しながらの保存であった。そのため、都市計画道路の変更と伝建地区の指定の2つを実現するのに8年近くの長い歳月を要した。

#### 富田林寺内町の特徴

寺内町地区を歩くとわかることだが、同地区には飲食店や土産物店、宿泊施設がほとんどない。その意味では、いわゆる「観光のまち」というよりは、「古い町家の残る住宅地」である。同地区がめざしたのは、あきらかに「観光開発型」のまちなみ保存ではなく、「生活環境型」のまちなみ保存である。まちの中には、江戸時代から明治、大正、昭和初期までの古民家が建ち並んでいるが、富田林寺内町ではこれらすべての建物をある時代の伝統的な様式に統一するのではなく、現代の生活や住環境を尊重しながらまちなみ全体の雰囲気を持している。つまり、あくまでも地域住民の住みやすさを追求したまちなみ修景である。

とはいいながら、観光客を遠ざけてきたというわけではない。地域の約500世帯のうち260世帯

#### ■旧杉山家住宅

富田林寺内町で最も古い町家建築で国の重要文化財。杉山家は寺内町の創立にかかわった八人衆の一人。江戸中期以降、造り酒屋として財をなし、町割りの一角を占める広大な敷地の中に主屋、酒蔵、土蔵など十数棟が軒を接して建てられており、最盛期には70人以上が働いていたといわれる。

屋敷内部の造りも贅を凝らしたもので、能舞台を模したともいわれる大床の間には狩野派の絵師による老松の絵が描かれ、その奥には茶室も設けられている。一方で、ダイドコ（台所）の北には後世に2階に上がる螺旋階段が設けられ、伝統とモダンが同居した造りとなっている。

明治の末に活躍した「明星」派の歌人、石上露子（いそのかみつゆこ、本名は杉山タカ）はこの杉山家の出身。旧家の家督を継ぐ運命のため、思いこがれた初恋の人に対するかなわぬ思いを詠んだ詩「小板橋」は、当時の文学青年や詩人に広く愛読されたという。



市の施設として一般公開されている旧杉山家住宅  
（正面（左）とその内部（中央）、右はアール・ヌーボーの香りが漂うらせん階段）

以上が参加する「富田林寺内町をまもり・そだてる会」は、住みやすいまちづくりを基本としつつ、3つの部会をつくりまちを訪れる人たちに対応したまちづくりにも取り組んでいる。たとえば、企画事業部会が中心になって、町の通りを約1千個の行灯で照らす「寺内町燈路」を開催、広報部会では、瓦版の発行やカレンダーの作成、また、研修部会では先進地や伝建地区との情報交換、見学なども行っている。

06年4月、訪問者の休憩施設および市民の交流の場として「じないまち交流館」がオープンしたが、「富田林寺内町をまもり・そだてる会」ではその管理・運営を引き受けてまちを訪れる人のもてなしを行っている。また、地元住民たちでボランティアガイドの会が結成され、来訪者の案内も行っている。

08年1月には、寺内町だけでなく、近鉄富田林駅前と寺内町を結ぶエリアなど寺内町周辺の住民、商業者、地域活動団体などが集まって富田林駅南地区まちづくり協議会が立ち上げられた。同協議会では、歴史・文化と共生する「賑わい」と「おちつき」のあるまちづくりを目的として、「寺内町四季物語」などの集客イベントの開催、商店街や寺内町の空き店舗・空き家の活用、まちの情報発信などを行うなど、寺内町かいわい活性化への動きも始動している。



寺内町四季物語のポスター  
春の「じないまち雑めぐり」(左)と夏の「寺内町燈路」(右)

### おわりに

近年、まち歩きがちょっとしたブームになっている。古い町家が集積し歴史文化を感じながら散

策できる富田林寺内町にも訪れる人が増えてきた。特に、昨年8月に橋下大阪府知事が寺内町燈路の行われているこのまちを訪れて「450年前のまちの空気感が残るまち」と評したことや、大阪府の大阪ミュージアム構想でミュージアムに登録されたことなどをきっかけに来訪者がさらに増えているという。



来訪者へ休憩、  
情報提供サー  
ビスを行う  
「じないまち  
交流館」

「じないまち交流館」  
の向かいには、来訪  
者向けの飲食施設が  
できている



これまでこのまちでは「住環境の品質」を追求し「生活環境第一」のまちづくりを進めてきた。まちを訪れる人が増えているということは、これまで行われてきたまちなみ景観の整備、まちの魅力づくりをまちの外の人が評価していることの証しとあってよい。

健康志向や歴史文化への知的欲求の高まりを受けて、まちへの来訪者は今後も増えていくものと思われる。こうした状



生活のまちでもある寺内町

況を受けて、今後は良好な住環境の維持という観点だけでなく、まちの活性化という視点から来訪者を「どのように位置付け取り込んでいく」かが問われることになるものと思われる。

富田林寺内町のまちづくりは、来訪者の増加を受けて新たな段階を迎えている。

(井阪英夫、山城満)